

らず、やとるものは弓をしらず、我が馬には人のり、人の馬には我のり、つなひだる馬にのつてはすれば、くいをめぐる事がぎりなし、その次んちがき宿々より、ゆう君ゆふ女どもめしあつめ、あそびさかもりけるが、あるひはかしらけわれ、あるひはこしふみおられて、おめきさけ家事おびたし。

〔鳩巢小説上〕一越前ノ一伯忠直卿ハ隠レモナキ暴君ナリ、○中夜ニ入テ壹岐杉田氏ヲ召候故、壹岐覺悟ヲ極メ、今晝ノ義ニツキ、定テ死罪ニ仰付ラルベキト存候間、必ウロタヘ申マジキ旨、妻子ニ申聞セ置、登城仕ル處、○下

〔伊呂波字類抄字事〕疑 ヲタカフ

〔運歩色葉集字〕疑

嫌 孤 詭 間 誘 恣 崑 業 協 猜 霽 惑

〔書言字考節用集言辭〕疑

嫌疑

〔倭訓栞前編四〕うたがふ 疑をよめり、未必の意なれば、うたかたを用らかしたる詞也、日本紀に

猜をよみ、眞名伊勢物語に猶字もよめり、猶豫の義也、○中俗語に七度尋て人を疑へといふも、妄に邪疑すべからざる意也。

〔拾芥抄下本諸教誠〕源信僧都四十一箇條起請

應重禁制條々 ○中

一雖有少々損不可疑於人、○下

〔古事記上〕於是天津日高日子番能邇邇藝能命、○中唯留其弟木花之佐久夜毘賣以、一宿爲婚、○中

故後木花之佐久夜毘賣參出自妾妊身、今臨産時、是天神之御子、私不可産故請爾詔、佐久夜毘賣、一宿哉妊、是非我子、必國神之子。

〔日本書紀十四略〕元年三月、是月立三妃、○中次有春日和珥臣深目女曰童女君、生春日大娘皇女、○高橋